

作座考

— BANDED BLUE 2 —

東北芸術工科大学の7作家 —

日時 〇〇六年六月二十四日(土)〜七月九日(日)

主催 鶴岡アートフォーラム／鶴岡市教育委員会

協力 東北芸術工科大学

企画協力 美術館大学構想室

会場 鶴岡アートフォーラム

出展作家 和太守卓良／佐々木里知／小林伸好／水上修／金子透／降旗英史

会場構成 竹内昌義(建築家／本学准教授)

生け込み 三橋光彩(いけばな小原流師範)

展示協力 いけばな小原流／山内木工所



インタビュー採録
作座考 — BANDED BLUE 2・東北芸術工科大学の7作家展 — 空間デザインのプロセスについて
竹内昌義

ようにしたいと思いました。

そのために考え出した仕掛けが、地元の杉材を使ったフレーム状のキューブ(箱)です。ひとりひとりの作家に、フレームをひとつずつ担当していただくことで、その場所がそれぞれの持ち味を發揮する空間として位置づけることにしました。長さ一・八メートル(大型作品では二・七メートル)の杉角材をフレームにしてキューブ状に組み上げ、それぞれをブースとして作家ごとに割り与えました。結果的には、和室を想わせる空間ができあがり、茶道や華道と工芸品の持つイメージとも重なり合いました。これは、尺・間という単位で設計したことからくるもので、ひとつひとつのブースは建築的な要素も含んだ構成になっているといえます。

展示用品を設計する際に注意したのは、あまり加工してつくり込まないことでした。展示物が工芸品を中心としているため、展示台自体が主張してしまうと、もともと作品の素材が持つ良さを殺してしましますので、節が残ったままの角材でフレームを組んだり、表面があまり磨かれていないコンパネで台を組み立てたりして、なるべく生の材木に近い、多少荒さの

残る自然物に近い状態に仕上げました。

作家個別のブース構成に加えて、どのようにしたら全体にまとまりが出るかを意識しながら、展示空間の演出を考えました。まずは、あえて鑑賞するための順路をつくらないようにしました。普通なら作家ごとにスペースを区切ってブースを作り、その範囲内で構成を完結させるのですが、今回は、隣の作家との境界を意識した構成を考えました。陶芸や漆芸、金工といった領域が違う作品ですが、作家どうしの関係性が見えてくるような、互いに干渉しあえる空間を演出したかったからです。

実際のレイアウトについては、二人の大学院生にアイデアを出してもらいながら、配置計画を練りました。スケール模型をつくり、フレームや展示台の位置関係や導線などについて、何度も繰り返して議論しました。通常、建築設計の空間構成では、模型によるシミュレーションが仕上りのイメージを再現する最良の方法として用いられています。コンピュータグラフィックスの方が万能だと思われがちですが、仮想カメラの画角やパースが自由になりすぎて、かえって人の目で見えた結果とはかけ

離れてしまうことが多いからです。

ライティングについても、大きささまざまな作品を引き立てるために、個々にスポットを当てたうえで、さらに塊としてまとめて照らすなど、微妙な調整を行いました。広く薄暗い空間の中で、作品が浮き上がって見えるようなドラマチックな演出になったと思います。

また、展示構成の中で、複数の作家の作品がひとつに集まる豊敷きの展示台や、素材の違う花器に生け花を生け込むスペースをつくりました。作家ごとに、あるいは陶器・金属・漆器などの素材ごとに違う個性の茶道具を並べてみたり、地元の華道団体とコラボレーションを試みたりするなど、鶴岡という文化的な土壌にふさわしい展示を演出できたのではないかと考えています。

(構成 美術館大学構想室)

竹内昌義 Masayoshi Takeuchi

1962年神奈川県生まれ。東京工業大学修士課程修了。建築家。現在、東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科准教授。建築家ユニットみかんぐみ共同主宰。カミカンカグなどの家具の制作。建築デザインを主に、家具、プロダクトの設計を行う。主な作品に『NHK長野放送局』(長野県、1996)／『高田あけぼの保育園』(熊本県、2001)／『愛・地球博トヨタグループ館』(愛知県、2005)など。主な著書に『団地再生計画／みかんぐみのリノベーションカタログ』(INAX出版、2001)／『POST-OFFICE ワークスペース改造計画』(TOTO出版、2005)など。



降旗英史 Hidehumi Hurihata

デザイナー・造形作家／プロダクトデザイン学科教授
プロダクトデザインと環境芸術を専門とし、家具、製品、都市環境、パブリックアートの分野で研究・実践活動を行っている。主な仕事に、上越市謙信公広場のモニュメント2基(新潟県)1992、グッドデザイン賞1999、同2004、山形エクセレントデザインセレクション大賞受賞2000など。新制作協会会員、日本デザイン学会理事。



小林伸好 Nobuyoshi Kobayashi

漆芸家／美術科工芸コース教授
乾漆技法を主にした立体造形作品を制作する。近年はレリーフ状の平面作品も制作し、自然の風景や環境をテーマにしている。変塗技術における技術・技法を調査・研究し、産地の技術開発やデザイン開発に従事。2005年にはスペインにて変塗ワークショップ、講演を行う。また、東南アジアを中心に漆液、漆技術の調査も行う。



水上修 Osamu Mizukami

漆芸家／美術科工芸コース准教授
漆芸の中の加飾技法、ことに蒔絵や併用される螺鈿・平文・卵殻などの素材・技法を研究しながら創作活動を行っている。また、これらの表現技法をいかした製品開発や工芸品の修復も手がけている。日本伝統工芸展等に出品。92伝統工芸新作展奨励賞、94・98・01宮内庁買上、03日本漆工協会会長賞。



金子透 Toru Kaneko

金属工芸家／美術科工芸コース准教授
伝統的金属加工技術をもとにジュエリー、クラフトワーク、オブジェを制作。近年薄い金属板による制作展開を主としていて、国内外にて発表を重ねる。コレクション／ビクトリア&アルバート美術館、フィラデルフィア美術館等。



作座考 - 1 - 花器と生け花のコラボレーション

(左から)和太守卑良、佐々木理知、金子透による花器に、三橋光彰(いけばな小原流)による生け込みがおこなわれた。



和太守卑良 Morihiko Wada

陶芸家/美術科工芸コース教授
現代陶芸の旗手として、独自の手法と文様による手びねりの造形を試み、個展の度に新しい作風を発表している。海外での個展や展覧会出品も多く、広く評価を得ている。昨年よりボストン美術館「Contemporary Clay」展に出品中。近年連続企画の「和太歳時器」展を毎年催し、古来の陶芸技法による作陶の試みを展開している。



作座考 - 2 - 展示台を茶室に見立てて

竹内昌義が設えた畳敷きの展示台の上に、出品作家が制作した陶、漆、金属などの素材による、茶碗・茶入・花入・水指・香合・茶杓が並べられた。



佐々木里知 Richi Sasaki

陶芸家/美術科工芸コース専任講師
(本名: 佐々木理一)
造形作品制作を中心に器、インテリア、陶壁なども手掛ける。練込技法、化粧技法、色絵など、加飾と焼成に研究を重ね、近年は素材の表情と物のあり方の実験作品を展開している。サロン・ド・ブランタン賞など受賞。ほか公募展入選多数。上市市に陶磁研究アトリエを開設。伝統工芸東日本支部準会員。

